

『視聴覚教育』一九八二年一月（日本視聴覚教育協会）

感想

視聴覚教育賞の審査を終えて

能力開発工学センター常務理事

矢口 新

ここ数年来、視聴覚教育賞の候補報告書を見ていてだんだん心配になり出したことがある。それは一言でいえば、学習をしている人間の姿が見えなくなってきたことである。教育をしている先生や指導者の人たちの姿はよく見えるのである。大へん苦勞をしてもらえる。ご苦勞様とどれにも申し上げたい。

だが教育というものはそれだけではいけないのだ。教育の仕事というものは、その行動によってその対象となる被教育者が育って行かなくてはならない。そこに昔から教育の仕事のむつかしさが感じられ、それ故にさまざまな工夫も行なわれて来ているのだ。視聴覚教材を利用するのも原点はそこにあることはいまでもないと思う。

だから視

聴覚教材を利用して教育する場合も、相手がどう育っているのか、ということ常に出発点として工夫をするということ忘れてはならないのである。どんな教材をどのように使ったら、学習者がどのように育ったかということがいつも考えられて、実践の工夫がなされな

ければならないのだ。

そのことは、外ならぬ視聴覚教育が過去から現在までにどのような教育の中に位置づいて来たかを見ればよくわかるのである。それは貧困な教材しか所有しなかった時代において子どもたちをいかに自然や社会の現実の中へとびこませるかを工夫して生まれて来た。それは子どもの生活の中身を豊かにするためのものであった。そして子どもがいかに目をかがやかしてそれを自分の成長に役立てて行ったかは私のような老人の年代のものなら誰も感じたことなのである。そこには学習する子どもの感動があった。

そしてそこから視聴覚教育運動がはじまった。そういう教材を使って学習の場を豊かにして、学習する人々の心をゆたかにしてやってほしいという運動である。このことは、今も厳として自覚しておくべきことであろうし、皆の人がそう信じていることだと思ふ。

しかしそれと共に教育する者が常に問題にしなければならぬのは、この時代に、この社会に人間がどういう環境におかれていて、どういうことを考え、何をしなければならぬのか、とくに子どもに対しては未来の社会を生み出してゆくのに何をしなくてはならぬのか、何を考え、何ができなくてはならぬのか、ということを通して行動をするということであろう。教育というのは、古今東西おなじことをやっておればよいというような思想は一九世紀のものでしかないのだ。今の生活の具体的問題の中から、未来に生きるための行動力を身につける場をつくってやること、それに手助けすることがいわゆる教師の仕事であろう。それは昔も今もかわりがないのだが、その中身は時とともに変わらなければならない。

そうだからこそ、今教育にたずさわるものは、今の社会の環境の中

で、人間がどうなっているのか、どういう行動力がこれからの人間に要求されるのかを生き生きととらえていなくてはなるまい。そこからどんな学習が大切なのか、それはいかなる教材を準備するのか、そしてその結果、学習したものがどのように育ったのか、自分の描いたイメージの人間に育ったのか、こういった姿勢が教育に生命を吹きこむのである。

この視点と姿勢が失われると、教育の仕事はとめどなく惰性に流れその生命を失って墮落することになるのである。

さて話をもどして、視聴覚の仕事にたずさわる人々が一所けんめいに努力していることは、報告書にもじみ出て、そのことにはいつも深く感動させられるのだが、それ故にこそ、上に述べたような今の人間に何が必要なのか、未来をつくる子どもに何が必要なのかという視点を失うことがあつてはならない、特にそのことに強く意識を働かしてもらいたいと思うのである。そうでなければ、校内暴力、家庭内暴力、暴走族、受験戦争、青少年非行の増大、などといった社会状況、教育状況の克服にむかうことはできないのではないか。視聴覚教育の伝統からいってそういう目標こそまさにふさわしいものであろう。

こういう視点で報告書を見ると、はじめに述べた、学習する人たち、子どもたちの姿が見えないということは、どうしても気になることである。報告者の頭の中にそういう視点が稀薄になっている、あるいは欠落していると思えないのである。

くりかえしているが、報告者の努力が足りないというのではない。そうではなくて、大へんな努力をしているからこそいうのである。たとえばこみ入った学習の場のシステムをつくるのが現代の流行であるが、きめの細かい複雑なシステムができて、教師という猿まわし

に廻される猿になって行くということもなきにしもあらずではないか。とくにそのことによって学習者がどういう場でどういう行動をするようになったのかというような視点が失われると、たとえば受験戦争突破型の人間にはなるが、自らの意志をもって行動する人間にはならないということもありうるのだ。つまり指導する側の目がシステムにばかり向いて、学習者が具体的にどうなったかに向けられなければ空廻りになるのではないか。

もちろん指導者としては、学習者が生き生きと、主体的に行動し、自主的に探究するというような人間的目標を描いていることはわかるが、それは具体的にどんな学習の場面で、つまり言葉を身につけるときか、社会を考えるときか、自然を探究するときか、そこでどんな問題をもつて、どんな活動をして、どんな仮説を生み出し、また何をくり出したのか、そういった具体的な場面で目標が生かされているかどうかはつきり把握されなければならないのである。それには指導する側でもどんな考え方をし、どんな行動をする人間となつてほしかが、一つ一つ具体的学習の場で明確になつていなくてはならぬ。

そういうことは、一般論として、どんなふうには扱えられないので、教科の場の問題なのだ。そういうものが指導者になれば、報告書もまたそのようなムードを持つて来ると思うのである。その辺が視聴覚の報告書には欠落しているのは、視聴覚教育という課題のあり方からも制約を受けることが察せられるが、しかしどうもそればかりでもないように思われる。指導者が次第に体制的なシステムに流されて、そのシステムを追究するという方向に目が向いていないのではないか。再び過去の天皇制的教育へと向うおそれなしとしないのである。

視聴覚教材を使えばよいのではない。VTRを使えばよいのではない

い。八ミリやTPを作ればよいのではなく、何を使うのか、何をどう
いう内容のものとするのか、学習者がただシステムの中で活動してお
ればよいのでなく、どのような考え方をもち、どういう人間となっ
たかが問題なのである。その中身が見失われてはいないか。

教師がいわゆるオルガニゼーションマンとなり、そういう行動の仕
方をししないと、学習者はロボットの如くになりそれに反抗しよう
とする者は暴力を振う。このような教育状況を打開するために視聴覚
教育がその実力を発揮するとすれば、視聴覚教育の中に閉ざされて
てはならないと思う。開かれた視聴覚教材利用を考える必要がある。
教科の世界の中で独創的な発想をする覚悟が欲しい。教科はマンネリ
ズムになっているが、視聴覚教育もただ視聴覚教材を使えばよいとい
うマンネリズムに陥ってはならないのだ。それには現在新しい人間像
が求められ、また描かれているその新しい波を十分に受けとめなくて
はなるまい。